
日番谷十二面相 ～ 生誕祭 ～

夜聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日番谷十二面相〜生誕祭〜

【Nコード】

N0746J

【作者名】

夜聖

【あらすじ】

12月20日。知る人ぞ知る日番谷の誕生日。各隊の隊長、副隊長たちは毎年恒例である祝儀を開催するが、例のブツによってまたも混乱する。

日番谷子供化注意報特別編。

前半はギャグ率が低いです。

01：天より天敵

「ごめん冬獅郎、本っ当ごめん！」

「……」

12月21日、日番谷冬獅郎誕生日の翌日である。

十番隊隊舎日番谷私室、朝から仏頂面の部屋の主と、彼に向かって必死に謝罪をしている死神代行の姿。

日番谷は二日酔いによる頭痛に耐えながら一護の謝罪の言葉を聞き流していた。

誕生日に起きた騒ぎと悲劇。

誕生日だから、とかそういうものにこだわる気は毛頭ないがそれでも昨晚の騒動は日番谷には許せないものだった。

日番谷に酒は厳禁。酒が入った時の日番谷を一護はよく知っていたが、どうやら他隊の隊長たちは知らなかったらしい。

そりゃそうだろうと思う。

今まで数え切れないほどの飲む行事があったが、日番谷はすべて頑なに断っている。

だが今回は、そうもいかなかった。

普段真面目な日番谷の暴走。

そして新たな事実として、一護と日番谷が同時に酔ったらとんでもない大騒ぎになることが発覚したのだ。

「へ？冬獅郎の誕生日？」

12月20日、事件当日。いつもどおり気まぐれで尸魂界を訪れた一護は、朽木ルキアにより十三番隊へ連行され、何やらやたらとテシヨンの高い浮竹に企画だか何だかの話を聞いていた。

「何だ、一護知らなかったのか？」

「しらねーよ。大体アイツ、自分の事とかめったに話さねえし」

てつきり一護なら日番谷の誕生日だとわかってやってきたと思っていたらしいルキアは拍子抜けしたように言う。

一護はそんな彼女を見て溜め息をつきつつ、浮竹に言った。

「それで、俺にはどうしろと言うんすか？」

「そうだなあ……ごちそうは女性陣に任せてあるし、会場は清音たちに任せてあるし……まあ、日番谷隊長のお守でも」

「いや、お守って浮竹さん、冬獅郎の事何だと思ってるんすか」

「頑張りやさんだよな」

「はあ…そうっすか」

朗らかに笑う浮竹に、一護も反論する気がそがれたのか小さく返し、ルキアを見る。

ルキアは大きくうなづくと一護の背を思い切りたたいた。

「というわけだ、行って来い一護、頼んだぞ」

「た、頼まれても…いつてえ！分かった！分かったから殴るなルキア…！」

笑顔のルキアに頭を殴られた一護は十三番隊を飛び出す。

浮竹の「頼んだぞ一護くん！」という声を背に思わずため息が漏れた。

まあ、日番谷の誕生日なら一護も何かしてやりたいという気持ちがある。

お守かどうかはともかく、皆が準備を終えるまでフォローしてやつてもいいだろう。

そう考えながら歩いていると、十番隊の門が見えてくる。

そしてその門を呆然と見上げる銀髪の少年の姿。それが日番谷であることは遠目でもすぐに分かった。

「冬獅郎ー！」

「黒崎…」

手を振りながら駆け寄ると、日番谷は半ば呆然としたまま振り返り
呟く。
その様子が若干動揺を表していた。一護は軽く首を傾げながら尋ね
る。

「どうした？」

「いや…俺にもよくわからねえ…」

門に視線を戻した日番谷は何処か慄然としながら答える。
実際何がどうなって今の状況に陥っているのかわからなかった。
何だって自分が隊舎から追い出されなければならぬのか…。
そもそも部下たちが総動員で隊首を追い出すことなんてしてもいい
のか。

「あー、まあ、大変だったな…」

その理由を知っている一護は曖昧に答える。

今回の企画に彼らが密接にかかわっていることは考えなくとも分か
ることだ。

恐らく日番谷には内密にしたいがために彼を隊舎から追い出してし
まったのだろう。

何もわからない日番谷が動揺するのも無理はない。

一護は日番谷に向かってニツと笑みを見せると彼の手を引き歩きだした。

「ま、いいじゃねーか、そこらへんぶらぶらしようぜー!」

「は!?!?だが仕事が…」

「いいじゃねえかよ、誕生日くらい忘れろよ」

誕生日。その三文字に日番谷はきょとしたが、やがて溜め息をつき、頭をかく。

そして一護を睨むと再び溜め息をついた。

正直、ことごとく睨まれている気がするがその理由がわからない。一護は若干口をとがらせながら拗ねたように言った。

「な、何だよ…」

「いや…なるほどな、すっかり忘れてたぜ」

そういえば今日は12月20日か…。最近カレンダーすらまともに見る暇がなかったから忘れていたが…。

そう思いながら、少し困ったように日番谷は肩を竦める。

「今年はまた何やらかしてくれるんだか」

「な、何だよその言い方…」

「毎年こうなんだよ…そろいもそろって仕事放ってな」

殆どの隊でこの時期は毎年お祭り騒ぎだ。

十一、十二など例外もあるが、十、八、十三を中心にいつも走りまわっている。

去年なんて隊舎を追い出されはしなかったが執務室に隔離され、半日ほど浮竹の雑談につきあわされた。

迷惑なのありがたいのかは分からないが、皆のその気持ちは素直にうれしい。

「そっか…冬獅郎愛されてんだな！」

「言つと思つたぜ…つか頭に手を乗せるな！！」

日番谷は無造作に寄せられた一護の手を振り払う。

愛されている…か。確かに彼らの好意も分からなくもないが、面と向かって言われると何だか照れくさくなってくる。

というか、この男はどうしてそんな恥ずかしいことを力いっぱい言えるのだろうか。そこが疑問だ。

「幸せだな、冬獅郎」

「でめーはクサイぞ、黒崎」

「うるせー」

一蹴されたが本気でそう思ったのだから仕方がない。

十番隊の隊員たちは皆、少し妬けてしまうほどに日番谷を思っている。

浮竹や京楽、その他の隊長たちだって日番谷を大切にしているのはそれだけでよくわかった。

なにより、誕生日を毎年祝ってくれるということは幸せ以外の何物でもない。

そして、その企画に自分も当たり前のように参加できているということが一護には嬉しかった。

ついこの間までは敵だったはずの自分を仲間だと認めてもらえているようで、ここが居場所だと言ってもらえているようで。

「で、今年はおまえが俺の相手役か？」

「おう！…って何だよその嫌そうな顔」

「…面倒なことになったな」

「オイ！！」

真顔で言う日番谷に向かって一護は思わず怒鳴ってしまう。

去年は浮竹の無限トーク。その前は市丸に連れまわされ、行く先彼と喧嘩ばかりしていた。

日番谷は一通り記憶を掘り起こし、一護を見上げてふと笑う。

「今までの中ではいい方かな」

「おまえ、何気に酷いから…まあ、褒め言葉として取っておいてやるけど」

「矛盾」

「冬獅郎!!」

一護は思わず片手を振り上げたが、日番谷の横顔を見てそれを下ろす。

なんだかんだいって毎年楽しみにしているのかも知れない。

思った以上に彼らの気持ちを受け止めているのかもしれない。

口先では皮肉っぽく言っても、彼にとって皆の気持ちは十分すぎるほど暖かいものなのだ。

…あんな表情を見せられては、文句も言えなくなるではないか。

「…とにかくどうか行こうぜ。行きたい場所とかあるか？」

「黒崎に任せる」

「おう、任されたぜ…」

一護はそうため息をついて踵を返す。

日番谷が後ろからついてきていることを確認し、空を仰ぐ。

雲ひとつない真っ青な空。冷たい冬の空気に丁度良い暖かさの太陽。

…駄目だ、調子狂う。

あんなやわらかな笑顔を見せられては一護もどうすればよいのかわからなくなってしまう。

「冬獅郎」

「あ？」

「殴って」

「……」

思わずそんな事を言うと、日番谷は足を止め、変な目で一護を見る。無理もない、今のは思い切りDM発言だ。我ながら何を言っているんだと思う。

日番谷は一護を無視して先を歩いてゆく。予想どおりの反応だ。だがここで奴が出てくるとは誰が思おうか、しらけきったその場は一気に騒然となる。

空に入った亀裂。そこから割れて現る別の空間と、そこから降ってくる白い狐。

「じゅーばんたいちよーさん!!」

「い、市丸!？」

バタバタと着物をはためかせて向かってくる（降ってくる）のは戸魂界から離脱したはずの反逆者、市丸ギンだ。

彼の声を聞いた日番谷は動揺をあらわに仰け反って天を仰いでいる。彼の登場は一護にとっても衝撃的だったのだろっ、彼も目を大きく見開き、空を見上げていた。

市丸はそのまま日番谷の目の前に着地すると何事もなかったように言う。

「元気しとった？」

「元気もくそもねえだろ！てめえ何しに来やがった!？」

怒鳴りながら構える日番谷。氷輪丸は持っていないが鬼道を放つつもりかもしれない。

一護も背の斬月に手をかけ、市丸を睨んでいる。

だが市丸の一言によって、彼らの敵対心はそがれることになる。

「なにで十番隊長さん今日誕生日やろ？」

「は？」

毒気を抜かれるとはまさにこのことだ。日番谷はその場に棒立ちになり、口を開いたまま市丸を見る。
何なんだ一体。こいつは瀨霊廷に背いてまでも日番谷を祝いに来たというのだろうか。

「ど…」

日番谷は顔を俯け、のどの奥から若干かすれた声を出す。

「どのッラ下げてきやがったクソ狐————!!!!!!」

彼の怒号は瀨霊廷中に響き渡った。

02：一護激昂

「何だっただ…一体…」

あれから数十分後、日番谷と一護の姿は流魂街の某甘味処にあった。お茶が二つ並んだ机の上に頬杖をつき、日番谷は心なし遠い目をしている。

一護はメニューを見ながら先程から漏れている彼のぼやきを聞き流していた。

「冬獅郎、甘納豆食うか？」

「……食う」

ため息交じりに答える日番谷。

市丸の登場により、かなりの体力、精神共に消耗したことは確かだ。かなり小刻みな感覚で溜め息については、一護を苦笑させる。

一護は彼を横目で見ると手を挙げながら大声でオーダーする。

「すみませーん！甘納豆と白玉あんみつ！」

「やっぱ要らん」

「もう頼んだっつの！食べよ！」

叫んだあとにキャンセルされても面倒なだけだ。
そう言っただけで軽く一喝すると日番谷は舌打ちをする。

今日の日番谷は、かなり微妙な気分だった。

態々虚圏から現れた市丸。

藍染が居なかったのは幸いだったが、これは素直に受け止めていいものなのかはわからなかった。

尸魂界を揺るがせた、世界の平和を乱そうとしている反逆者に普通に祝福を受けて。

「つーかあいつアホだろ。普通何の気なしにやってくるか？」

「まあいいじゃねえか。俺もびっくりしたけど、少なくとも市丸は好意で来たんだろ？」

「それでも普通なら来ねえだろ……」

再び溜め息。

そして茶を一気に呷ると、運ばれてきた甘納豆を口に放り込む。
なんかもう、ヤケクソ状態だ。

「でもすげーよな。今度現世でも祝つか？多分井上にすげーモン食わされっけど」

「嫌がらせかよお前…冗談じゃねえ」

織姫の料理のすごさは日番谷もよく知っている。

というか、彼女の料理を一目見ただけでもものすごい警戒心がわく。先遣隊で彼女の家泊まったときだって、死ぬような目に遭ったのだ。

その時の記憶を掘り起こされた日番谷は甘納豆をつまむ手を止め、じと目で一護を見る。

一護は彼を無視しながら、白玉を口に運ぶ。

「ま、それはともかく素直に受け止めとけばいいじゃないか」

「忘れた方がましだ」

「あそ。じゃあ忘れろ」

実際市丸は暇潰しか何なのかは知らないが、からかいに来たにすぎない。

正義感の強い日番谷にとって藍染を筆頭とした三人組は何より許せない者となっているはず。

特に藍染には憎悪の一言だろう。

そんな自分が現れたら彼はどんな反応を示すか。

市丸の従来からの他人をからかって遊ぶ嫌な癖が出てしまったのではなからうか。

そんなことのために、虚圏からはるばるやってくるとは市丸もバカ

である。

「取りあえずこれ食ったら何処行く？いつまでも居座って雑談するっつーわけにもいかねえだろ」

それにせつかく流魂街に来たんだし、色々と行きたい場所もあるだろう。

任せるとは言われたが、正直言ってここの事をあまり知らない一護にはどうすることもできない。

日番谷は甘納豆を咀嚼し、飲み込むと更に甘納豆をつまみあげながら答えた。

「ああ、それなら一軒行きたい場所がある」

「ってまた甘納豆かよ！！」

一護が連れてこられたのは、甘納豆などの菓子が売っている小さな出店だった。

そこで日番谷は普通に甘納豆を注文し、購入している。

食べたばかりなのにまた甘納豆。

どれだけ甘納豆が好きなんだこいつは！と思わず突っ込みを入れた

くなる。

そんな一護の横で、日番谷は金を台に置きながら言う。

「俺が食うんじゃないよ。土産だ」

「土産？乱菊さんにか？」

「違う」

適当に置かれたおつりと、甘納豆の入った袋を取り、日番谷は踵を返す。

それを追おうとした一護だが、店員が何処か憐れむような目でこちらを見ているのに気がつき、訝しげに眉を顰めた。

「あの、俺の顔になんかついてますか？」

「いや…大変だね君も」

「は？」

「あの子、上司かい？」

「只の友人ッスけど」

友人…なのか？

自分で言っておいて、一護は首をかしげる。

只の知り合いにしても親しい方だし、少なくとも上司ではない。
一護としては「仲間」がしくりくるのだが、ここで「仲間です」
ときっぱり言うのもなんかバカっぽい。
だったら友人でいいかと思う。

だが一護がそうして自己完結している目の前で、店員は驚きに目を
剥いている。

「……なんか変なこと言ってるか？」

「いや…無理やり付き合わされてるのかい？可哀想に」

「……」

その言葉を聞いて、背筋に悪寒が走った。

そして、前に乱菊が言っていたことを思い出す。

日番谷が流魂街に居たころは、周りの人に恐れられ、蔑まれていた
こと。

今では大分おさまったが、前の偏見からか未だに彼をよく思わない
人がいること。

その話を聞いたとき一護は思った。そいつらは、日番谷の事など全
くわかっていない。

何も知らないくせして、偏見で人を判断するなど。

「何も分かってないアンタに言われたくねえよ」

低く、地を這うような声。

若干怒りに伴って霊圧が出てきているのか、店員は冷や汗をかいている。

そしてそれに気がついた日番谷が振り返り、目を見開いている。

「アンタは冬獅郎の事何もわかってねえだろ？　どんだけ優しい奴なのかも。勝手な推測で人を判断してんじゃねえよ！」

バン！　と思い切りカウンターを叩く。

そしてそのまま踵を返し、「行くぞ」と強引に日番谷の手を引いた。

日番谷は何も言わず、一護に引かれるままについて行く。

最初は何暴走してやがるんだこいつはと、一喝するつもりだったが彼の怒りが自分のためだったと知って何も言えなくなった。

あの時も、店員の自分に対しての扱いが酷いからと乱菊が立腹していた。

そして今は一護が。自分は全く気にしないのに、周りの者ばかりがそれに耐えられない。

日番谷にはそれが辛くもあり、同時に何だか胸が暖くなる。

「お前、いつもあんなところで買い物してるのかよ」

怒り。

一護の声は、まだそれを抑えきれていない。

むつつりとした一護の横顔を見上げながら日番谷は答える。

「一応な。ばあちゃんが好きなんだよ、あそこの甘納豆。それにあれにはもう慣れたしな」

確かに最初は戸惑ったが、今はそんなのどうでもいい。

適当に注文して、金を払って、おつりと商品を取って帰る。

別に売ってくれない訳でも、行きたび罵られる訳でもないので気にしなかった。

「けどアイツ、冬獅郎の事何もわかってねえくせして……」

「わからねえに決まってるだろ。プライベートな接触がねえんだし。それに、お前は俺の事をよくわかってくれてるんだろ？」

「……いいのかよ、お前はそれで」

「十分すぎる」

そう言っで一護の手をほどき、一人前へと進む。

一護はしばらく考えるように立ち止まっていたが、やがて溜め息をつくと日番谷を追って隣につく。

「で、何処に向かってんだよ？」

「ばーちゃんとかだよ。せっかく流魂街に来たんだしな。どうせなら会って行きたいじゃねえか」

そう言う日番谷の横顔はいつもより穏やかだった。

自分の事を誰より理解し、育ててくれた大好きな祖母。

あの頃は人間など大嫌いだったが、唯一祖母は好きだった。

そして今も、時々ある非番の日によく顔を出す。

当時の日番谷にとって祖母の存在は救いであり、かけがえのない存在だった。

そしてそれは今でも変わらない。

「もしかしてお前の行きたい場所ってそのばあちゃんのところか？」

「…悪いかよ」

「いや…そう言えはいつだったか、誰かが冬獅郎はばあちゃんっ子だって言ってたっけな。乱菊さんだっけ」

「うるせえよ…」

そんな他愛のない会話をしているうちに、一軒の民家が見えてくる。心なしか、それを見た日番谷の歩くペースが速くなった。

本当に、祖母の事が大好きなんだと一護は思う。

日番谷の表情がなんだか嬉しそうに見えるのは、気のせいではないだろう。

日番谷は民家の前に立ち、無造作に扉を開けると、彼にしては珍しく、何処か生き生きとした声で叫ぶ。

「ばーちゃん居るかー？」

そう叫んだと同時に、部屋の奥から誰かがぱたぱたと走ってくる音がする。

それを聞きながら、一護は呆然としていた。

あまりにも現実感がないから？それとも、日番谷の意外な一面に驚愕したから？多分どちらも、答えではない。

おそらくこういう完全なプライベートを、一護の前で普通に見せていることに呆然としているのだ。

自分のプライベートなど、他人には見せたがらなそうな日番谷がこつも自然にここに来て、自然に行動している、そのことが。

部屋の奥から出てきた祖母は、嬉しそうに日番谷を見ながらまるで孫を迎えるおばあちゃんのように出迎え、一護を見る。

何故か目を丸くした彼女を見て、一護は何だか出ていききたい衝動に駆られた。

「冬獅郎、そつちの子は？」

「ああ、只の付属物だよ」

「付属物の黒崎一護です。って何だよそれ！！」

思わずノリツツコミをしてしまったが、付属物とはあんまりではないか。

祖母は日番谷に食いかかる一護を見て更に目を丸くし、日番谷もまさかそんな反応をされるとは思っていなかったのか、意外そうな目で一護を見上げる。

「お前、まだ興奮してんのか？ いい加減落ちつけ」

「誰の所為だよ！ 付属物はねえだろ付属物は！！」

「それじゃあ只のストーカーだな」

「お前は俺の事何だと思ってるんだ！！」

「猪突猛進単純バカ」

「黙れこの冷徹小人！！」

そんな彼らの言い合いを見て、祖母が小さく吹き出す。

日番谷に掴みかかろうとしていた一護は動きを止め、日番谷も溜め息をついて祖母に向き直った。

「仲いいんだねえ… 何だかばあちゃん安心したよ」

「……別に、そう言う訳じゃねえけど。取りあえず甘納豆買ってきたから、茶にしねえか？」

日番谷はごまかすようにそう言い、手に提げた甘納豆を差し出す。祖母はそれを受け取ると、二人を促して嬉しそうに居間へと向かった。

昔から日番谷は抑えきれない霊圧、そして容姿と性格ゆえに氷のようだと恐れられていたことを祖母を知っている。

そして元から冷めたところがあり、友達など作ろうとしなかった日番谷が客人を連れてきた。

一人で帰ってきてくれる時も勿論嬉しいが、一護と一緒に来た今はそれ以上に嬉しかった。

「…すげえな、冬獅郎」

「何がだ？」

「あ？独り言だけど」

「そうかよ」

どれだけ祖母が日番谷の事を大切に思っているか、それが一護にはわかった。

そしてここに居る日番谷はいつもより何処か穏やかで、どこか楽しそうな気がする。

そんな日番谷の一面を見ながら、なんだか濃くした気分になる自分はバカだろうかと思う。

それでもやはり、今日戸魂界に来てよかった、日番谷の事を任され

て良かったと、一護は思った。

03：準備で賑わう十三隊

「きゃー！なんか爆発したー！！」

「ら、乱菊さん何入れたら爆発するんですか！？」

その頃、十番隊の台所では乱菊と雛森がケーキを作るのに悪戦苦闘していた。

生地もどうにか完成し、後はオーブンで焼くだけ。そのはずだったのに、それは突然爆発し木っ端微塵に吹っ飛んだのだ。

デコレーションの下準備をしていた雛森は、キヤーキヤー騒いでいる乱菊に駆け寄り、後ろから覗き込む。

そこから見えるのは、原形をとどめていない僅かな灰だけだった。

「ごめん雛森、赤火砲で焼こうとしたら加減間違えちゃった」

「なんで鬼道で焼こうとするんですか！？」

「ほら、やっぱりオーブンで焼くよりあたしの火で焼いた方が愛情たっぷりじゃない？」

「…とにかく普通に焼いてください」

また作りなおしだよー、と肩を落としながら小麦粉や砂糖を測る雛森を見ながら、乱菊は「ごめんね」と両手を合わせる。

実は先程から砂糖と塩を間違えたり、分量やオーブンの温度を間違えたりでかれこれ4回は作り直しているのだ。

乱菊は彼女の手元を覗き込んだり、冷蔵庫を開けたり閉めたりで何だか落ち着きがない。

雛森も隣でちらちら動かれては落ち着いていられず、溜め息をつくと泡立て器を片手に言う。

「乱菊さん、やることないならイチゴのヘタ取ってください」

「へ？一護のヘタレ？」

「苺のヘタです！よくありそうなボケしないでください！」

「やーね冗談よ。これ取ればいいのね？」

乱菊はけらけらと笑いながら雛森の横につき、苺を手取る。

「イチゴと言えば、今年の隊長のお相手は一護みたいね」

「黒崎くんですか？」

「そ、大丈夫かしら隊長。て言うか一護もうまくやってるかしらねー」

ぷちん、とヘタがもぎ取られる音が響く。

乱菊はそれをゴミ袋に入れ、新たに樽を手を取った。

「いつだったかギンが隊長のお相手担当したじゃない？あの時はすごかったわね、何をやらかしたのか、アイツ半身凍ってたじゃない」

「あの時は日番谷くんすごく不機嫌でしたよね。元々市丸隊長と日番谷くんって水と油みたいなモノだから」

あの時市丸が選出され、ものすごく嫌な予感がしたのだが、案の定だった。

市丸が出てきた時の日番谷のいかにも嫌そうな表情は忘れない。

そして浮竹の時は、かなり疲れた様子で日番谷が出てきたのに対し、浮竹がものすごく生き生きしていたのを思い出す。

はたして今年はどうなるか。一護が日番谷の怒りを買い、半身氷結するか、一護が日番谷の疲労を蓄積し、ピンピンして帰ってくるか。それともまた彼のやり方で、新しい顔を見せてくれるか。それもまた、楽しみだった。

「まあ一護の事だからあたしたちの予想もつかないことするんだろうけど」

「それに対しては日番谷くんもかなわないって言ってましたよね」

「て言うか雛森、それ泡立てすぎじゃないの？つぶれてるけど」

「へ？あーっ！っ！」

「ねえ浮竹、何で木にデコレーションなんかしてるんだい？」

その頃会場にしつらえられた一番隊の大広間では、浮竹、京楽などを筆頭に、複数の死神達が会場の飾り付けをしていた。

ずらりと並べられた縦長のテーブルの上には、女性隊士たちが作ってきた料理が並んでいる。

そしてまばらに酒も（騒動の元凶）並んでおり、見るからに準備は万端と言った状態だった。

そんな中で、浮竹が突然木を持ち出し、それに色々と飾りを付けている。

「誰かの誕生日を祝うのに柎に飾りをつけるって聞いたからね。こ
うやって日番谷くんを祝ってあげようと…」

「それって違うよね？クリスマスだよね？キリストだよね？」

「……日番谷隊長はイエス・キリストのように頑張り屋さんだよ！」

「浮竹、それ訳わからないよ」

何やら拳を握り、熱弁する浮竹にやれやれと肩をすくめる。

浮竹は時々天然だと、京楽は思う。日番谷に言わせたら「天然っつ
ーより基本的に脳天気なんだろ」と言いそうだ。

実際浮竹は人がよすぎるのか何なのかは知らないが、人の手に負えないほど天然で脳天気な面があると思う。

「隊長！向こうの飾りを終えました！あとは何をすればよろしいでしょうか？」

「朽木、日番谷隊長はイエス・キリストのように頑張り屋さんなんだよな？」

「は…はい？」

突然キリストだが頑張り屋さんとか、訳のわからないことを言われたルキアはぽかん、と立ち尽くす。

京楽は「ルキアちゃんこまってるじゃないのー」とそれを見ながら笑っている。

時々この隊長は訳のわからないことを言っ困らせてくれる。

以前など、「一護くんはミカンが好きだからオレンジなのかな？イチゴなのに」と本気で悩み、清音や仙太郎も弱っていた。

そしてそれを一護に告げたら、何とも微妙な表情をされたものだ。

「えっと、日番谷隊長がイエスのようだとおっしゃりたいのですか？」

「頑張り屋さんなんだよな日番谷隊長は。そう、頑張り屋さんなんだよ！」

「何処までそれを押したいの君は。まあ、日番谷くんがすごいのは認めるけどさ」

やれやれ、と京楽は肩をすくめる。

ここまでになると、相槌を打つまで彼の暴走は止まらない。

そんなに気に入っているのか、日番谷の事となるとそれが更に顕著だった。

これでは聞いている方も、言われている本人も多少ながらも迷惑だ。特に日番谷なんか、度々苦虫を噛み潰すので何だか哀れにも思えるが面白い。

「とにかくそれ終わったら呼びに行くかい？ルキアちゃん行ってくれる？」

「はい！行つて参ります！！」

「今じゃなくてこれが終わったらね？」

「……はい」

その頃日番谷と一護は祖母の家を後にしようと玄関に立っていた。祖母と一護とでかなり会話が弾み、それが日番谷についての事だったため一護の隣に立つ日番谷はげんなりと肩を落としている。

つかれた、というより恥ずかしさがこの場合勝っているかもしれない。

普通、本人の居る前で優しすぎるからなんだとかこういうところがすごいとかそういう話はしないだろう。

何だかバカみたいに誉めたたえられて、逆に疲れた。

「それじゃあ一護くん、またいらっしやいね」

「はい、機会があつたら」

「ねえだろうな」

「何だよ冬獅郎。そんな冷たいこと言わねえでまた連れて来てくれよ。それじゃなかったら勝手に通うぞ」

「……勝手にしろ」

相当ここが気に入ったのか、親に外出をねだる子供のような表情で一護は言う。

正直その相手をする気力さえない日番谷は、適当にそう答えると踵を返した。

「それじゃあばあちゃん、今度は一人で来るから」

「勝手についてきますから」

「黙れ付属物」

「付属物じゃねえ!!」

そう言いあいながら、二人は家を後にする。

大小二つの背中を見ながら、祖母はふと微笑んだ。

「いい子に巡り合えたようだねえ……」

そして今度は失くさないように、そう祈りながら祖母は部屋の中に入ってゆく。

勿論彼女は草冠の事を知っていた。そして、理由は知らされていないが彼がもうこの世に居ないことも。

それを語る時の日番谷の表情は、見ているだけでも辛かった。

草冠を信頼していたのを知っているから、どれだけ大切に思っていたのかをしているから、余計に辛い。

だからこそ一護と親しげに話し、普通に喧嘩腰になる彼を見て、ものすごく安心した。

「つーか冬獅郎、まさか帰る気満々?」

「これ以上こっちに居ても何もねえだろ。それとも例の甘味処で喧嘩してくるか?」

「……やめろ、つーかあそこ行ったらマジで冷静さ失うから」

「元から欠片もねえのにな」

「お前今日容赦ねえよな」

先程からボロクソ言われている一護は歩きながら溜め息をつく。

そう言えばいつまでこうしていればよいのかなど、そういう肝心なことを聞いていなかった。

準備が終わったら誰かから連絡が来るのか、それとも一定の時間になつたらこちらの方から出向けばいいのか。

そもそも会場が何処かさえ、一護は知らないのだ。

今更ながらまずいと思う。

何も知らない状態で自分はどうするか。

ルキアに連絡を取って訊くにも伝令神機も持っていないし、天挺空羅などの縛道すら一護は出来ない。

このまま尸魂界に連れ帰ろうか、それとももう少しここにいた方がいいのか、一護は頭を悩ませる。

そうして唸っている一護を横目で見ながら、日番谷はため息交じりに言う。

「取りあえず瀨霊廷に戻って適当に時間潰すか？下手したら更木に捕まるかも知れねえけどな」

「け、剣八！？それだけは勘弁してくれ！」

「決まりだ、更木に追われながら時間を潰す」

「そんなどMっぽいこと言っくんじゃねえ!!」

そう言えばいつしかネルが無限追跡ごっこなんていうものをしながら思い切り泣いていたなーなんて思う。
しかも自分から「ネルはドMなんで」とか言っていたのを覚えている。

…まあ、今はそんな話はどうでもいい。

「それじゃあ何処かで鬼道教えてくんねえ?」

「それはパスだ。お前才能ねえし、諦めろ」

「そんなはつきり言うかよ…」

確かに一護には鬼道の才能がないかもしれない。
だけど最初からそう望みを切り捨て諦めるとは、護廷の隊長が言うことだろうか。

「とにかく戻ろうぜ。どう時間を潰すかはともかく…」

「一護ー! 日番谷隊長!」

日番谷が門の方向を指すとその方向から二人を呼ぶ声が聞こえてきた。
向こうからかけてくる黒髪の少女、ルキアだ。

「ルキア？」

「準備が終了したので呼びに来たのだ。すみません日番谷隊長。こ奴が何か失礼なことをなさいませんでしたか？」

「何だよその言い方… いつもこいつもひでえよな」

口をとがらせ、文句を言う一護の隣で日番谷はあごに手を添え、考え込んでいる。

本気で考えるものだから、本気半分、冗談半分だったルキアも戸惑うしかない。

歩いていると突然降ってきた市丸。それがやたらとインパクトが強く、他の事はあまり覚えていない。

他に衝撃的だったのが店員に向かって一護がキレたことと祖母と一護が雑談に花を咲かせたことだろうか。

これと言って、特別不愉快に思ったことはない気がする。

日番谷はそう結論付けると、面倒なのかかなり適当に答えた。

「まあ、黒崎だからな」

「どういう意味だよ、それ…」

「そのままであろう。とにかく瀨霊廷に戻りましょう、みんな待っています」

「ああ、悪いな朽木」

ルキアは「とんでもございません！」と思い切り頭を下げる。

「護はそれを見ながらゲンナリと溜め息をつくど、「取りあえず行こうぜ」と彼らの先頭に立って瀟霊廷へと向かった。

04：一護暴走

騒動へのリミットは刻一刻と迫ってゆく。

毎年の事だが、誰にどう進められても酒なんか決して飲まないと決めている日番谷も、未成年の自分が飲酒するなんて思わない一護も、数時間後に待っている騒動など知る由もなかった。

只毎年のように普通に普通に祝われて、普通に楽しい時間を過ごせる。そう、信じ切っていたのだが皮肉にもそうはいかなかった。

「たーいちょー！お帰りなさい」

日番谷と一護は、ルキアに促されて一番隊隊舎を通り、例の会場にやってきた。

毎年思うのだが、何も自分のためだけに一番隊を設けて盛大に祝うことはないと思う。

他の隊長たちにもこうするわけでもないのに、単なる鼻屑のようで多少後ろめたいところがあった。

だが以前に、何の気なしにその理由と聞いて絶句したのを覚えている。

総隊長曰く、日番谷のように幼い子供はやはり誕生日は盛大に祝ってもらいたいだろうと。

…思い切り子供扱いされた日番谷は、総隊長を怒鳴りつける訳にも、

反発するわけにもいかず毎年こうして祝ってもらっていると云った次第だ。

それを一護に言ったら、「お前もつくづく苦労人だよ……」と言われたが、まあいつもの事だから諦めている。

それはともかく、乱菊のこの胸アタックも毎度の事だが、呼吸を止められることに慣れはしない。

毎度の如く、乱菊の背中を思い切り叩きつけるが、彼女は腕の力を強めるばかりだ。

まただとも思っていたのか、呆れたような眼差しを向けていた一護も見兼ねて止めに入る。

「乱菊さんいい加減学習しろよ。それ、冬獅郎息出来ねえから」

「息に詰まるほど愛情込めてみました〜!」

「そう言う問題じゃねえから!!」

今日の乱菊はいつも増してテンションが高い。

純粹に日番谷を祝いたいのか、酒が飲めることに喜んでいるのかは知らないが、少し抑えた方がいいと思う。

そうしてもう少し冷静になって、日番谷を見た方がいい。

「ったく、誕生日に部下の胸で窒息死ってどんだけ間抜けなんだよ」

そつばやきながら一護は日番谷を救出してやる。

日番谷は一護に両脇腹を捕まえたまま肩で息をし、懸命に酸素を取り入れている。

「はあっ…はあっ…わ、悪い、黒崎」

「おう、精々悲劇の誕生日になんねえよう頑張ろうぜ」

「ちょっと！どういう意味よそれ！！」

喚く乱菊を無視して、日番谷はずんずんと進んでゆく。どうもこうも、テンションが高いときの乱菊は抱きついてくる確率が普段より割増であり、危険度もそれに比例する。

彼女の手によって主役が昇天しないか、そう言うことだ。

日番谷は会場の前まで行き、一呼吸置いてから扉に手をかける。扉を開けてからの目の前のテンションは毎年相当高く、わかっていても多少たじろぐ。

今回も若干緊張しながら扉を開け放ったが、目の光景を見て拍子抜けした。

「…は？」

「何だよ、誰もいねえじゃねえか」

呆然と立ち尽くす日番谷の後ろから一護が身を乗り出して言う。その後ろではルキアと乱菊が意味深な笑みを浮かべていた。

日番谷は訝しげに眉を寄せ、きよろきよろとあたりを見回しながら中へと入る。

部屋の四隅にある七色の電球による光を放った木は何だ？

ずらりと陳列するテーブルの上には日番谷の好物など料理が並んでおり、律儀に酒瓶と御猪口までが並べてある。

「何だよルキア、フライングしたんじゃないか？」

「まあ、一護は黙って見ておれ」

嫌味半分言つと、ルキアは自信に満ちた笑みを浮かべる。

乱菊も戸惑う一護にウィンクして見せた。

「…松本、他の連中は…」

「日番谷くんお誕生日おめでとー」

「おわあっ！！？」

振り返り、乱菊にそう言った瞬間、目の前を遮った黒い物体。それらは次々と日番谷を囲み、口々に祝いの言葉を口にする。柄にもなく相当驚いた日番谷は目を見開いたまま、鼓動の早くなつた胸に手を当てる。

目の前に立つ雛森は彼の反応を見て何故か喜んでいる。

周りを囲む京楽や浮竹、恋次と吉良たちも何だか嬉しそうだ。

「ひ、雛森てめえ！どつという登場だ！？」

「びつくりした？毎年同じようじゃつまらないからちよつとしたドッキリしかけてやろうかって阿散井くんが」

「けど天井に待機しようって提案したのは吉良だぜ？でも日番谷隊長がここまで驚くとはな」

「おう、決定的瞬間を写真に収めたぜ」

「黒崎っ！？」

ノリがいいというか何というか、冗談を言った一護は「冗談に決まってるじゃねえか」と笑って見せる。

それにしてもこれだけの人数が天井に張り付いておきながら気付かないとは、日番谷としても不覚だった。

一本取られた、と溜め息をつき額に手を持っていく。

「取りあえず席についてゝあたしと乱菊さんでケーキ焼いたんだよ！」

「失敗の連続でしたけどね。でも最後にはちゃんとしたのが完成しました！」

そうして雛森と乱菊に促され、日番谷はケーキの置かれた中央の席

に腰を下ろす。

一護もそれに続き、乱菊に肩を押されて隣に座った。

「それじゃあ日番谷くんの１０歳の誕生日を祝して！」

「誰が１０歳だ！っ！かお前それ去年も言っただよな！？」

「あれ、そうだったけ？日番谷くん毎年身長変わらないからわかんなくなっちゃったよ」

「え、冬獅郎去年もこのサイズか？…身長止まっちゃったのか…可哀想に」

「……雛森、黒崎。今日は大目に見るが次はねえぞ…」

「それじゃあみんな言いたい放題に隊長をからかっていいわー！」

「てめえは別だ松本っ！！！」

思い切り怒鳴られた乱菊は「そんな理不尽な…」と口をとがらす。それを見ながら笑う一同。そんな中で、いつの間に居たのか即席のステージ上に総隊長が立つ。

「ぺいっ！皆儂を忘れてはおらんか！」

「あ、山じいだ。仕事終わったのかい？」

「何のこれしきじゃ。ところで乾杯の儀式は今年も儂が務めることに依存はなかるうな？」

こんなときまで、総隊長の威厳は健在だ。

日番谷をからかって遊んでいた乱菊たちも表情を引き締め、総隊長を見る。

正直言つてムードぶち壊してはないのか、と一護は思ったが、黙っていた方がいいこともある。

「それでは日番谷隊長、ご起立願おうか」

「…はい」

若干溜め息が混ざっていたのはきつと気のせいではないだろう。

一護は立ち上がった彼を見上げながら苦笑する。

そして周りの者たちが何やら構え出したのを見て、ぎよつとした。

例の件を知っているルキアや乱菊、恋次や十番隊員などはそれらを不思議そうな、あるいはまさかと言った表情で見つめている。

だが何も知らない他の隊長格たちは、例の物体を日番谷に向けている。

そして日番谷はそれらには全く気付いていない。

「ちょ、ちよつと待てよ、まさか…」

初めて一護が知った時は、無理やり乱菊に注入された自分が日番谷にまで摂取させ、大混乱を招いた。

一護の部屋を出ていく時の彼の捨て台詞はかなり印象的で、いまだに覚えている。

そして太った虚に襲われかけていたのもまた印象的だ。

一番記憶に新しいのは間違えて乱菊のものを飲み、暴走したこと。猫に敵対心は燃やすし、それを止めた自分は睨まれるしで大変だった。

それほどこれに弱い隊長に、こいつらは一体何をしようとしている？ 楽しいはずのお祝いを、たかが一つのものでぶち壊そうとしているのか？

「ちょ、ルキアこれどういうことだよ！」

「し、知らぬ！だがもしかしたら京楽隊長辺りが後で企てた可能性が…」

「あーもう！無知つてのはこえーなオイ！！」

知らないからこそこういうことをやらかしてしまう。

というか日番谷も天敵が自分に向けられているのだから、気付いてもいいのではなからうか？

「それでは乾杯じゃ！」

「ちょ、まってくれー！！」

総隊長の掛け声と同時に日番谷に向かって噴射されるアルコールの噴水。

一護は彼をかばうように前に出たが、足がもつれてかばいきれず、結局一護も日番谷もそれを浴びることになった。

全身を酒で濡らしながら日番谷は呆然と立ち尽くす。

一体何が起こったのか、というかこのむせかえるような匂いは、アルコールか？

その隣では乱菊が不安げに彼を見上げ、雛森もひきつった表情で見ている。

床に這いつくばるような形になっている一護は口に入った酒の不味さにむせていた。

「……あの、大丈夫ですか隊長？」

「…なん、とか」

日番谷は慄然と答える。

酒の臭気より、突然ぶっかけられたことの衝撃が大きく、幸い頭は冴えていた。

それより、自分の足元で思い切りむせている一護のほう気になる。日番谷が彼に視線を落とすと、ルキアが慌てて一護に近づいた。

「い、一護大丈夫か…？」

「大丈夫なわけねえだろ！！誰だよ冬獅郎に酒ぶっかけようとか言いだした奴は――！！！！」

「お、落ち着け一護！！」

テーブルに足を乗せ、思い切り激昂する一護をルキアが押さえる。そう言えば一護も、酒には弱かったはずだ。だとしたらこの暴走、酔ってしまっているのだろうか。

一護の突然の激昂に、一同は呆然としている。
恋次は「やっちゃったか……」と頭を抱え、一角や弓親はきょとんとしていた。

「も、もしかして一護も酒には弱いのか？」

「そうかも知れないね。美しくない」

美しいとかそういう問題か？と隣の恋次は思ったが、あえて突っ込まないことにした。

そんな彼らのひそひそ話など知る由もない一護は、更に怒鳴る。

「冬獅郎はな！酒飲むとガキ化すんだよ！冬獅郎はそれをすっげー恥じてんだよ！冬獅郎の秘密なんだよ！！」

「っってお前思い切り暴露してるだろうが――！！」

「おう！暴露しちまったぜ！」

威張るな。

最早そう怒鳴る気も失せ、日番谷は溜め息をつく。

それに酒の匂いにやられてくらくらししてきた。全く、これだから酒は嫌いだ。

大体これが死神の飲むものなのか、と思ってしまう。

「何なら見てみるか！？冬獅郎のアルコール摂取後の状態を！」

「だから落ち着け！つか酒を持つな！誰か止める！」

彼の一言に反応して、乱菊が一護を止めにかかろうとする。

だが一護が思い切り酒瓶を振り回したため、彼に近づくこともままならなかった。

いくら酒が好きだと言っても、酒瓶で殴られて怪我するのはごめんだ。

だが乱菊が避けたことによって真後ろに居た日番谷とその隣のルキアが、額にその直撃を受ける。

日番谷は思い切りのけぞり、ルキアは額を押さえて蹲ってしまった。

「うつわ……」

「もしかしてボク、やっちゃいけないことしちゃったかもね……」

その騒動を目の前に、完全に引いた様子の浮竹と、自分の提案とその実行に後悔する京楽。

その隣では、白哉が言葉もないというように目を伏せている。

総隊長は最早騒ぎを収めることも忘れ、呆れかえっている。

死神代行の暴走、それにはもう、慣れてしまっているのかもしれない。

「……鎖条鎖ば……くっ!？」

日番谷は怒りに顔を俯け、低く唸るような声で鬼道の詠唱をする。だがイキナリ一護に引き寄せられ、それは阻まれた。

彼の片手には酒瓶。そしてそれが段々と迫ってくる。

まずい、と思う。このままではまた暴走し、大騒ぎを起こしてしまう。

それだけは何としても避けたかった。

皆がこうして好意で祝ってくれているのに、自分の手でそれを滅茶苦茶にしてしまうなど、日番谷には許せなかった。

だから出来る限りの力で一護に抵抗し、できる限り拒む。

それにしても周りにこれだけの人数がいて何故皆助けようとするのか。

白哉や碎蜂などもう駄目だと思ったのか、溜め息をつくと立ち上がり、会場から出て行ってしまう。

元凶でありながら何事もなかったように酒を飲み始めるとはどういう見だ、京楽。

浮竹も寝たふりをするな。総隊長は何でそこで髭の手入れを始める。

もう、何から何まで滅茶苦茶だった。

「それじゃあ行くぜー！」

「行くなアホー！ー！ー！」

日番谷の抵抗も空しく、一護の手によって騒動は更に混乱を極める。

05：当事者と傍観者

確か以前も、黒崎には無理やり酒をのまされたことがあったな…。あのときは思い切り抑えつけやがるから抵抗もままならず不覚にもやられて…って今回もそうか。

なんでこんな力任せなんだよこいつは…（怒）

日番谷はそんな事を考えながら、次々と口腔内に入ってくる液体を嚥下する。

その度に胸がムカムカして気持ち悪い。同時に、何だかイライラが募ってきた。

大体何だつて一護はいつも酔うと日番谷に酒を飲ませるのだろうか。相当駄目なのを知っていて、絶対に受け入れられない忌み嫌うものだとは知っていて、この男は酒を飲ませる。そう考えると、かなり腹が立ってくるのだ。

「…霜天に坐せ」

瓶が口許を離れたと同時に、日番谷は唸るような声で言った。攻撃するつもりは、満々だった。だが手元に氷輪丸がないため、何も起こらない。

一護はきよとしたまま、ぐったりと全身の力を抜き俯いた日番谷を下ろした。

「冬獅郎、俺は霜天に坐せません」

「何を言っておる…というか一護、貴様またやかしくてくれたようだな…」

真顔で妙なことを言う一護に、ルキアがため息混じりにツッコんだ。現世で日番谷が暴走した時も、彼に酒を飲ませたのは一護だった。それも条件は今回と同じく、酔った状態の一護が。

拳句これが悪酔いともいうのか、一護はどんどん飲むようになるのだ。一護の中に眠る不良が目覚めてしまう如くに。ルキアはそんな事を思ってしまう。

そして案の定、今も向こうのテーブルに置かれた瓶を手に取りその場に胡坐をかく。

「よっし冬獅郎、今日は二人で飲むか」

「んあ？」

何を思ったのか、一護はボケっとしている日番谷を膝の上に乗せ、二カツと笑う。

日番谷もぼけーっとしたまま一護を見つめていたが、何がそんなに苛立ったのか、べちべちと一護の頬をはたき始めた。

その表情が何かに対して抱いた不満をあらわにする子供のようで面白い。

「飲・む・か・じゃ・ねーよー!!誰のせいで何がなんだってなんな

んな…」

「ちよとちよつと！何言つてんですか隊長！！」

言葉になつていない言葉を放ちながらべしべしと両手で一護の顔面を押さえつける日番谷。

乱菊はそれに向かつて思わずツッコんだが、最早彼の耳には入っていないだろう。

終いには一護の膝の上で暴れ、床に置かれた空の酒瓶を振り回す。だがそれは彼の手からすっぽりと抜け、壁にぶつかって粉々に砕け散った。

床に飛び散った瓶の欠片。

それを見て以前日番谷がこれをかき集めて怪我をしたのを思い出したのか、苦笑する。

これを片付けた方がいいのだろうか、個人的に今の彼らを放っておけないためここから離れることは憚られた。

一方乱菊は、こころなし青くなりながら、隣でおどおどしている雛森の袖を引っぱる。

「ちよ、ちよつとおゝ！雛森これ止める手立て知らないの！？」

「そ、そんなこと言われても…こうなつたらもう酔いがさめるまでどうにもならない…」

「もうっ！恋次！修兵！あんたら男でしょ！何とかしなさい！」

「無茶苦茶言わんで下さいよ！日番谷隊長はともかく一護まで止め

る自信ねえツスよ！」

「なら隊長だけでも何とかして！」

「冬獅郎は渡さねえ！！」

「るっせえ放せタンポポ！！」

一護は日番谷を思い切り抱きしめ、恋次を威嚇する。

日番谷が相当嫌がって彼の髪を引っ張っているが、一護は全くひるみもしなかった。

むしろ彼は興奮するばかりで、日番谷を締める手に力を込めるのだ。

「痛てえ！黒崎マジで痛い！！」

「我慢しろよ。な？お兄ちゃんだろ？」

「何がだーーーー！！」

日番谷の怒りの絶叫が木霊する。

相変わらず髭の手入れを続行中の総隊長は、その声に驚き手元が狂ったらしく、「……切り過ぎた……」と何だがブルーになっている。

浮竹は日番谷を心配しながらもその場を動こうとはしない。

更に彼を助け出そうとした勇敢な十番隊士が先程日番谷が割った瓶の破片を踏みつけ、血みどろになっている。

終いには涙目になり始めた日番谷を見て、一護が慌てるのだ。

一護だけじゃない。彼の泣くところなんか想像もしなかったらしい京楽や浮竹、狛村までもが心なし慌てている。そしてスツと立ち上がった卯ノ花を見て、勇音が狼狽する。

「あの、隊長？」

「隊舎に戻っていなさい勇音。この先、怪我人が出ることを覚悟しなくてはなりません」

「……」

正直この騒ぎは隊長が脅しでもかければ一瞬で収まるのではないのでしょうか。

そう思った勇音だったが、色々と恐ろしいので黙って彼女の指示に従うことにした。

卯ノ花は日番谷を懸命にあやす一護の後ろで動けなくなっている十番隊士を立ち上がらせる。

そして彼女は彼の手当てをするために、彼を連れて黙って出て行ってしまった。

ここから逃げるのにいいチャンスだ、と思ったのか、京楽も浮竹を連れてそそくさと出ていく。

更に清音と仙太郎、七緒が慌てて彼らを追って行った。

後に残されたのは髭を気にする総隊長と、そんな彼を必死に慰める狛村。

二、四、八、十三以外の副隊長と一護と十番隊士、ルキアだ。

彼らはこの状況をどう対処すればいいのかわからず、固まっている。

「…吉良、ここで雛森をナンパして場を和ませろ」

「和まねえよ！余計空気重くなんだろ！」

妙なことを言い放った恋次に、吉良が口を開く前に檜佐木が突っ込む。

そんな三バカトリオを不思議そうな目で見ている雛森は鈍いと言いやうがない。

そしてその間にも騒ぎの中心は新たに酒を手取る。

「ごめん、ゴメンな冬獅郎？飲むか？」

「飲まねえよアホー！黒崎なんか大っきらいだー！」

「また言ってるし…」

「と……冬獅郎に嫌われたのか？俺」

乱菊が呆れる横で一護はかなりのショックを受けている。

そして泣くことに疲れたのか、暴れることもなくなった日番谷に何を思ったのか酒を突っ込み、自分も瓶ごと呷る。

只でさえ酒が入って酔っているのに、これ以上飲ませるとは鬼かこの代行は。

というか酔っ払った彼はなぜこつも日番谷に酒を飲ませたがるのか、かなり不明だがその謎を究明する手段は皆無だろう。

乱菊がそれを止めようとしたが今の彼らには近づかない方がいいと察したのか、ルキアが制した。

「今の一護は何をやらかすかわかりません。おそらく私にもどうしようもないかと……ここは、黙って様子を見ていた方がよろしいかと思えます」

「そうだね。日番谷くんもあれ、潰れかけてるし、きっともう少ししたら二人とも落ち着くよ」

「……わかったわ」

雛森の言うとおり、それから30分もたたないうちに彼らは潰れてしまった。

「……頭痛てえ……」

乱菊に聞かされた事を思い出しながら、机に突っ伏した日番谷は力なく呟く。

一護は小さくなりながら、ソファに寝そべっていた。

日番谷に酒を飲ませたのは紛れもない、自分だ。

そして頭がガンガンと痛むのは一護も同じだったが、自業自得に他ならない。

それにギリギリセーフだったところを自分が暴走することによって騒ぎにってしまったのだから、罪悪感も大きかった。

「つーか俺、冬獅郎の誕生日台無しにしたんだよな……ホント、謝っても謝り切れねえよ」

「別に、それはもういい」

溜め息をつく一護の後に、日番谷も溜め息をつく。

正直言ってこんな憂鬱な12月21日は初めてかもしれない。

だがそう言ったら一護が余計に罪悪感を覚えるだろう。言わない方がいいこともある。

一護はもう一度ため息をつく。

せつかくみんなが日番谷のことを思って準備したのに、酒一つでそれは台無しになった。

しかも自分が騒ぎを大きくしたのだ。

謝ったって時が戻るわけでもないのだから、悔いていたって何かが変わるわけでもないのだから、それなら何か実行に移さなければと思う。

流石にもう一度みんなだというわけにはいかないが、自分が彼を改めて祝ってやることくらいは出来るのではないか？

「…冬獅郎、明日暇か？」

「一応25日までは非番を貰ってる。けど寝たいな、とにかく」

「……そこを何とかさ、明日リベンジさせてくれねえか？」

だるそうに上体を起こしながら、一護は突っ伏したままの銀色の後頭部を見る。

日番谷はそれには答えず、依然として突っ伏し動かない。

「ほら、俺の部屋せまいからあんま人数呼べねえけどよ、乱菊さんと、井上たちとパーティーしねえか？クリスマス兼冬獅郎の誕生日とか。も、勿論井上に料理は遠慮してもらっぜ！！」

慌てて弁解する一護を、顔を上げた日番谷は無表情で見る。そして再び溜め息をつき、突っ伏した。

「井上にはつくらせるなよ」

「おう！取りあえず妹に頼むな」

「…夏梨にか？アイツ料理できるのかよ？」

「遊子だって。夏梨に作らせてもいいけど、アイツ焦がすぞ？」

「不器用そうだもんな、アイツ」

日番谷のそんな率直な感想に、一護は思わず苦笑した。

「それじゃあ乱菊さんも誘つとくぜ。明日迎えに来るからな！」

「って帰るのか？お前も二日酔いなんだろう？」

「こんなくらい平気だつて。帰ってゆっくり寝たいしな」

一護はそう言いながら立ちあがり、ひらひらと手を振って執務室を後にする。

廊下で乱菊とはち合わせたのか、早速誘う声を聞きながら、日番谷は眠りについた。

05：当事者と傍観者（後書き）

サイトでやっている日番谷誕生日企画の一部を抜粋してきました。
一応十二面相：なのですが今回はちょっと違ったような気がします
^^；

ここまで読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0746j/>

日番谷十二面相～生誕祭～

2010年10月9日19時26分発行